



世界の農業・農政

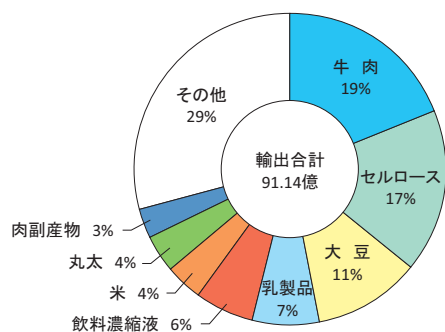
ウルグアイの農牧業と貿易

国際領域 行政専門員 下保 暢彦

1. はじめに

ウルグアイ東方共和国（通称、ウルグアイ）は地球上でちょうど我が国の反対側に位置します。南米の大国であるブラジルとアルゼンチンに挟まれ、南方は大西洋に面する、人口350万人の小国です。国土面積は我が国の半分以下ですが、国土の大半が平地あるいはなだらかな丘陵地で、温暖湿潤気候に属することから、全面積の8割以上が農地（放牧地を含む）として利用されており、農牧業が盛んな国です。

国内経済においては、総付加価値の5.9%（2019年、ウルグアイ中央銀行）が農牧業で生成されています。また国際貿易においても、総輸出額の80%以上が農林畜水産品で、第1図のとおり、牛肉や大豆、乳製品が輸出の上位を占め、さらにセルロースや丸太といった林産物も含めると上位を独占するなど、農牧業が重要な産業となっています。

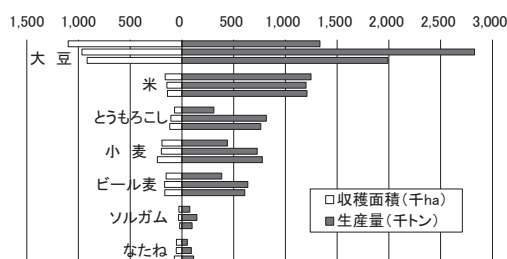


第1図 品目別輸出割合（2019年）

資料：ウルグアイ輸出投資促進庁推計¹⁾ から筆者作成。

2. 耕種農業（大豆）

耕種農業の動向をみると、輸出でも重要な地位を占めている大豆が、面積・生産量とも圧倒（第2図参照）しており、やはり輸出品目である米が続いています。



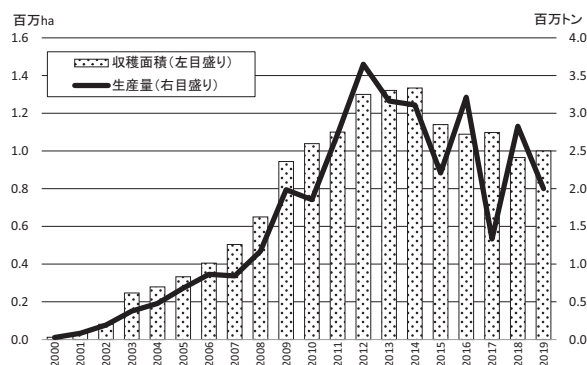
第2図 主要耕種作物の生産（2017/18～2019/20）

資料：ウルグアイ農牧水産省「統計年報」から筆者作成。

備考：各作物の横棒は上段が2017/18年度、中段が2018/19年度、下段が2019/20年度である。

かつては輸出货量もほどほどあった小麦は、近年では縮小傾向にあり、輸出でも地位が低下しています。

大豆については、南米の大生産国としてブラジル及びアルゼンチンが有名ですが、ウルグアイにおいても、2000年代に入りアルゼンチン資本の流入（牧草地の購入、賃借）により生産が急速に拡大しました。生産量は2012年に365万トンとピーク（収穫面積のピークは2014年）を記録した後は減少傾向にあります（第3図参照）。



第3図 大豆生産の推移

資料：米国農務省「PSD」から筆者作成。

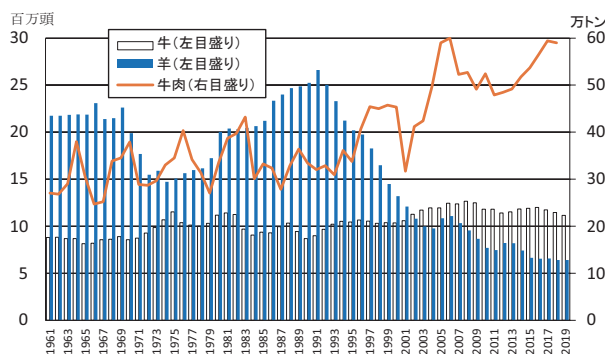
大豆の国際貿易では、大豆油や大豆かす（ミール）といった加工品の貿易も盛んですが、ウルグアイでは国内での加工向けはごく僅かで、生産されたほぼ100%（在庫変動や収穫時期の関係で、年単位では100%を超える年もある）が丸大豆（子実）のまま輸出されていることが特徴的です。その結果、生産の豊凶により年による変動がかなり大きいものの、純輸出量が年間197万トン（2017-19年平均、米国農務省「PSD」、以下同様）となっており、ブラジル（8,119万トン）、米国（4,976万トン）、パラグアイ（560万トン）、カナダ（411万トン）、ウクライナ（267万トン）に次ぐ世界第6位²⁾の大豆純輸出国です。また、その輸出先をみると、年による差異はあるものの、2010年以降では約7割（2019年は78%）が中国向けとなっています。

3. 牧畜業（牛肉）

広大な採草・放牧地を背景とし、牛や羊の放牧を中心とした牧畜業が伝統的に盛んで、その飼養頭数は人口の数倍となっています。羊は1990年頃をピークに減少傾向にありますが、牛のほうは微増傾向で、牛肉、乳製品の生産を支えています（第4図参照）。

特に牛肉は、国民の主要食料であると同時に重要な輸出品となっており、品目別の輸出金額をみても第1位を

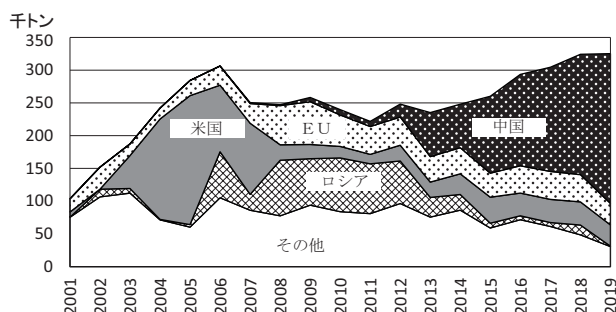
継続（2018年はセルロースが僅かに上回ったため、牛肉は第2位）しています。純輸出量は40万トン（2017-19年平均、米国農務省「PSD」、以下同様）で、世界的にもブラジル（200万トン）、インド（160万トン）、オーストラリア（156万トン）、ニュージーランド（58万トン）、アルゼンチン（50万トン）に次ぐ世界第6位の牛肉純輸出国となっています。



第4図 牛・羊の飼養頭数と牛肉生産量の推移

資料：FAOSTATから筆者作成。

輸出先をみる（第5図）と、2000年代前半は米国が最大の輸出先でしたが、2010年前後はロシアが、2013年からは中国が最大の輸出先となり、その量も近年増加傾向にあります。それに伴って、全体の輸出量も増加傾向にあり、2017年以降は30万トンを超えています。



第5図 牛肉の輸出先の推移

資料：ウルグアイ輸出投資促進庁推計から筆者作成。

注。EUは、全期間において2019年時点での28加盟国の合計である。

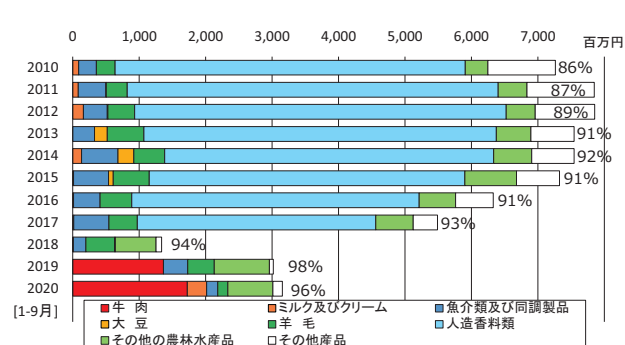
4. 我が国との貿易

2019年の我が国におけるウルグアイとの貿易を財務省「貿易統計」でみると、我が国からの輸出額は機械類を中心に53億円余、輸入額が農林水産品を中心とした26億円となっており、我が国の貿易額全体が約80兆円弱であることを踏まえると、ウルグアイとの取引関係は極々僅少となっています。

ウルグアイからの輸入では、9割以上が農林水産品・食品を占めていますが、2016年まで50億円程度を記録して

いた飲料濃縮液³⁾が2018年を境に急減した反面、口蹄疫の発生で中断されていた牛肉の輸入が2019年2月に再開され、ウルグアイからの輸入品目第1位となり、近年では農林水産品目の割合が95%を超えています。

なお、ウルグアイの主要輸出品目の1つである大豆は、2011～15年に僅かに輸入されていましたが、現在は輸入されていません。



第6図 ウルグアイからの品目別輸入額の推移

資料：財務省「貿易統計」から筆者作成。

- 注1. 横棒右の計数（％）は、輸入額全体に対する農林水産品・食品（図中の色つき部分）の割合を示す。
2. 品目の分類・名称は、その他と称するものを除いて財務省「貿易統計」の概況品の定義による。

5. おわりに

再開されたウルグアイ産牛肉の輸入は、2020年1～9月累計輸入量が1,856トン、我が国の輸入牛肉全体に占める割合は全体の0.4%とまだ低いものの、ステーキレストラン・チェーンで提供されるなど、2020年も前年を上回る勢いとなっています。また、ウルグアイは、最大の輸出相手国である中国以外のアジア諸国へも畜産物の輸出促進を強化していることから、今後、我が国のウルグアイからの輸入において、乳製品⁴⁾を含めた畜産物が更に増加する可能性もあると考えられます。

脚注：

- 1) 税関を通じる通常の輸出（63.02億ドル、全体の69%）のほか、経済特区（自由貿易区）からの輸出（28.12億ドル、全体の31%）を含み、税関・特区間の取引は含みません。
- 2) 世界第3位の大豆生産国であるアルゼンチンは、大豆加工品の輸出が盛んで、大豆（子実）の輸入も一定量あるため、子実の純輸出量ではウルグアイを僅かに下回ります。
- 3) 財務省「貿易統計」では化学製品の人造香料類（HSコード3302）に分類されていますが、ウルグアイの輸出統計から飲料濃縮物と判明したので、農林水産品・食品に含めました。
- 4) 第6図において、2020年に約2.9億円の概況品「ミルク及びクリーム」の輸入実績がありますが、これは飼料用粉乳（HSコード0402.10-216）です。